



明治期の演劇に描かれた保険

稲 葉 浩 幸

概要 1867年に福沢諭吉が『西洋旅案内』にて近代的保険制度をわが国に初めて紹介してから30年余りで、保険は演劇の世界にも進出した。保険をタイトルに冠した2つの芝居、1901年の「生命保険」と1908年の「保険ぎらひ」は、それぞれ「新派の父」と呼ばれる川上音二郎の改良座と、演劇改良運動に熱心だった福地桜痴が中心になって開場した歌舞伎座で上演された。明治維新による近代化の流れは、文化・芸術の分野にも押し寄せ、新たな現代劇が作られる中、「生命保険」は生命保険金殺人というテーマを巧みに用いたサスペンス作品に、「保険ぎらひ」は火災保険の勧誘を巡るドタバタ喜劇となっている。

本稿では、脚本が現存する「保険ぎらひ」に特に注目し、実際にどのような戯曲であったのか、そして近代的保険業が始まって間もない明治期の演劇の中で、保険がどのように描かれたのかについて、わが国の広告媒体として普及していた引札と、当時の火災保険業界の状況を踏まえながら検証を行う。

キーワード 生命保険、火災保険、新派、保険料率、大火

原稿受理日 2021年10月5日

Abstract Insurance appeared in the drama after introducing the modern insurance system in Japan by Yukichi Fukuzawa's "Seiyō Tabi Annai" written in 1867. The trend of modernization by the Meiji Restoration has also rushed into the fields of culture and art. In the process, new contemporary dramas were created. "Seimei Hoken" is a suspense work using the theme of insurance money murder. "Hoken Girahi" is a comedy about the conclusion of a fire insurance contract.

In this paper, we will examine how insurance is drawn in the drama of the Meiji era based on the "Hikifuda" which was popular as an advertising medium and the situation of the fire insurance industry at that time.

Key words Life insurance, Fire insurance, Shinpa, premium rate, great fire

I はじめに

保険を題材とした小説は多数あるが、近年、記憶に新しいのは1997年に発刊されミリオンセラーにもなった貴志祐介の『黒い家』である。『黒い家』はその年の第4回ホラー小説大賞を受賞したほか、1999年には森田芳光監督のもと映画化され話題となった。『黒い家』では、保険金殺人が疑われる事件の調査に乗り出した保険会社社員の恐怖と衝撃が鮮明に描かれている。実はこの保険金殺人をテーマにした演劇が、今からちょうど120年前の明治34年（1901）に東京の改良座という劇場で上演されているのである。改良座は「新派劇の父」と称される川上音二郎が東京神田三崎町に建設した川上座を前身とする劇場で、1901年10月14日の『東京朝日新聞』には、「改良座 同座は今十四日初日一番目「生命保険」五幕中幕「文七元結」二番目「大地獄」四幕の役割は左の如し⁽¹⁾」という見出しで、劇中の登場人物と役者名が紹介されている。10月14日に初日を迎えるという改良座の一番目に上演される演目がその名も「生命保険」である。この「生命保険」という芝居について、宮脇（1993）では次のように記している。

筆者の手許に、明治三四年十月十五日初演と刻した三崎町改良座（旧川上座）の「第拾貳回興行引札」があり、題目として、「生命保険」（壹番目）および「大地震」（貳番目）の二つが掲げられている。（中略）序幕を飾った「生命保険」については原作者が判然とせず、『日本戯曲総目録（一八八〇～一九八〇）』（加藤衛編、横浜演劇研究部、昭和六十年）および『演劇百科辞典』（全六巻、平凡社、昭和三五年）からもその筋立てを確認することが出来ない。あるいはこの折の興行のために特別に書き下ろされたものであつたのであろうか。改良座はこの後ほどなく火災を起こして全焼しているところから、関係する資料も焼失して今日に伝えられるところがなかったのかもしれない⁽²⁾。

引札とは、江戸時代に始まった宣伝広告のひとつで、現在でいうところのチラシやビラに当たる。宮脇にも書いてあるように、残念ながら「生命保険」の脚本を見つけ出すことは出来なかったが、調査の結果、同年10月23日の『東京朝日新聞』に「改良座劇評（上）一番目 生命保険」という記事が掲載されていた。劇評とともに、「生命保険」のあらす

(1) 『東京朝日新聞』1901年10月14日朝刊 p.4。

(2) 宮脇（1993）p.175。

じが紹介されていたので以下に抜粋する。

此狂言の筋は園田魁といへる貧乏華族が三浦という医師と共謀して賣卜者を園田の伯父と偽り生命保険を附て後に毒殺して保険金を欺き取り又大宮の善智院といふ寺へ奉加金の集りしを嗅付け三浦は寺男と化て入込み抱車夫を大師河原の役僧とし園田は講中の世話役と称して此寺に泊り往僧を毒殺して寄金を奪ひ其後園田は賣卜者の娘にて小雛と云る芸者と夫婦に成り遂には三浦の口より悪事露見して小雛を殺さんとする際に小雛が誤て園田を刺といふが結局なり⁽³⁾

要約すると、貧乏華族である園田は、三浦という医師と共謀して、占い師の男を自分の伯父に仕立て上げ、生命保険を掛けて毒殺した。まんまと保険金を騙し取ることに成功した園田は、三浦とともにさらに犯罪を重ねていく。そして、芸者の小雛（実は占い師の娘）と結婚した園田であったが、三浦の口からこれまでの犯罪を小雛に暴露され、小雛を殺そうとするが、逆に小雛に刺されてしまうという結末である。劇評では、三浦について「見るよう一癖ある医師にて後に小雛を口説き勿付けられた腹いせに園田の素性を明かす所などネッチリとして悪らしく優には打て付の役柄なり」⁽⁴⁾とあり、ここから三浦が小雛に横恋慕していたことが分かる。120年前の作品ながら、保険金殺人を皮切りに、犯罪と愛憎の入り組んだ内容で、現代のサスペンスドラマとしても通用するような複雑な作品となっている。

明治維新による近代化の流れを受けて、わが国初の近代的生命保険会社である明治生命が誕生したのが1881年のことであり、それからわずか20年後に、このような生命保険金殺人というテーマを巧みに用いた作品が生み出されたことは驚きである。

さらに宮脇（1993）によれば、当時のわが国には「いま一つ、明治期において保険がテーマとされている戯曲のあることを探り出すことが出来た。明治四一年五月に発表された、益田太郎冠者の筆になる『喜劇・保険ぎらひ』がそれである。この戯曲は火災保険の勧誘ぶりを描くものであるが、当時の勧誘ぶりがどのように採り上げられていたかを知るうえで極めて興味深い内容ものとなっている」⁽⁵⁾と述べ、この「保険ぎらひ」の中の保険に関連する場面を原文のまま抜き出して紹介している。喜劇というだけに、言葉遊びがあったり、

(3) 『東京朝日新聞』1901年10月23日朝刊 p.4。

(4) 『東京朝日新聞』1901年10月23日朝刊 p.4。

(5) 宮脇（1993）p.177。

ドタバタ芝居があったりとユニークな作品である。

そこで本稿では、この「保険ぎらひ」が実際にどのような戯曲であったのか、そして近代的保険業が始まって間もない明治期の演劇の中で、保険がどのように描かれたのかについて、わが国の広告媒体として普及していた引札と、当時の火災保険業界の状況を踏まえながら検証を行う。

II 引札から見る「生命保険」と「保険ぎらひ」

前章において、当時の広告媒体のひとつである引札について簡単に説明したが、引札の歴史は古く、1683年に三井越後屋が移転開業した際に「現金安売り掛値なし」の文句で有名な引札を十里四方に出したのがその始まりとされる。当時の引札は、このように開店広告や新商品の紹介などで多く用いられ、1856年には安政の大地震による火災で焼失した上野店の再建に伴い、松坂屋が55,000枚の引札を配布したという記録も残されている⁽⁶⁾。

このほか、催し物や興行の案内などにも引札は使用され、宮脇（1993）に記載のある改良座の「第拾貳回興行引札」もこれに当たるものと思われる。この引札の画像が貼付されていないため、宮脇が所持している引札と同じものかどうかは明らかではないが、「改良座演劇第拾貳回興行」の引札の画像を確認できたので、図1に紹介する。

右側に大きく「壹番目 生命保険」と書かれているのが分かる。その隣には、物語のあらすじが場面ごとに分かりやすくイラストで描かれている。新聞の劇評に書かれた粗筋だけでは判断が難しいが、右下のイラストがおそらく物語の最後の場面であろう。駆けつけた警察官の前で、小雛と思われる女がへたり込み、その周りに2人の男が倒れている。劇評では芝居の最後は「小雛が誤て園田を刺」⁽⁷⁾とだけ書かれているが、園田とともに悪事を行ってきた三浦にも何らかの形で天罰が下ったのであろうか。また、引札の右端には「明治三十四年十月十五日午前九時ヨリ開場仕候」と初日の日付が書かれているほか、下段には登場人物と役者名が、左端には座席ごとの料金が記載されており、現在の演劇公演のチラシとほぼ同じ仕様となっている。ただし、この日付について10月15日開場となっているが、前述の10月14日付の『東京朝日新聞』の記事では「今十四日初日」⁽⁸⁾とあり、初日の日付が1日異なっている。日本芸能・演劇総合上演年表データベースで検索すると、改良座

(6) 引札の歴史については以下の URL などを参照。https://www.edo-tokyo-museum.or.jp/purpose/library/reference/alphabet/5184/

(7) 『東京朝日新聞』1901年10月23日朝刊 p.4。

(8) 『東京朝日新聞』1901年10月14日朝刊 p.4。

図1 三崎町改良座引札



出典：

https://www.dh-jac.net/dbl/ban/results1024.php?f1=A-1-3R-01_001&f46=1&enter=portal&skip=0&-max=1&enter=portal&lang=ja

での「生命保険」の上演は1901年10月14日となっているので、単純な誤植か、もしくは15日に初演の予定であったのが、1日早まった可能性もある⁽⁹⁾。いずれにせよ、「生命保険」の演目の引札が確認できたのはこの改良座の1枚のみである。また、宮脇（1993）では、引札の左側の演目を「大地震」としてあるが、これは「大地獄」の間違いであると思われる。

一方、「保険ぎらひ」の引札について調べてみると、1908年のこびき町歌舞伎座、1909年の四条南座、1913年の久松町明治座の3カ所の劇場において挿絵付きの画像を見つけることができた。最初に、図2は1908年5月21日の東京こびき町歌舞伎座の引札である。

歌舞伎座は1889年に東京市京橋区木挽町（現中央区銀座）に建設され、座元や地名を劇場名にするのが一般的であった当時としては、上演する演劇のジャンルをそのまま劇場名とした極めて異例の存在であった。また既存の劇場より間口がはるかに大きく、近代的設備の整った劇場でもあった。現在建っている歌舞伎座は第5期にあたる⁽¹⁰⁾。

(9) <https://www.dh-jac.net/db/nenpyo/search.php> を参照。

(10) 歌舞伎座については <https://www.shochiku.co.jp/play/theater/kabukiza/history/> など を参照。

図2 こびき町歌舞伎座引札



出典：

https://www.dh-jac.net/db1/ban/results1024.php?f1=B-1-5L-01_015&f46=1&enter=portal&skip=0&-max=1&enter=portal&lang=ja

この歌舞伎座の引札を見ると、一番左に「太郎冠者氏作 笑劇 保険ぎらひ 壹幕」のタイトルと登場人物たちがイラストで描かれている。このイラストを資料として、まずは「保険ぎらひ」のあらすじについて説明する。

「保険ぎらひ」は、質屋の前で出くわした男2人が、お互いに相手に質入れがバレないよう腐心する場面から始まる。イラストでは右上にいる風呂敷を持った男2人がそれである。真ん中に腕組みをして座っているのが、この質屋の主人で名前を伊勢屋久兵衛といい、今時のハイカラ風が嫌いでとりわけ牛乳と保険が大嫌いな頑固者である。そんな久兵衛のもとへ共益火災の山川という男が保険の勧誘に通い始める。イラスト左下に座るこの山川という男は気障な服装に身を包み、顔は役者のような色男である。久兵衛の娘のお愛（久兵衛右）と召使の静江（その上）は山川に夢中である。半年にわたって勧誘に通い詰めるが一向に契約の取れない山川は、友人の安田（左上）に頼んで、質屋の外で半鐘を鳴らさせ火事騒ぎを起こさせる。慌てふためく久兵衛に、お愛と静江の協力もあって、山川はまんまと契約書にハンコを捺させると、嘘がバレないうちに慌てて店を後にするという結末となっている。

「保険ぎらひ」のタイトルの横に「太郎冠者氏作」とあるが、この太郎冠者とは、本名

明治期の演劇に描かれた保険（稲葉）

を益田太郎といい、太郎冠者というペンネームで多くの喜劇作品を書いているが、「保険ぎらひ」は1908年のこの歌舞伎座での舞台が初演となる。

次に、図3は1909年10月14日開場の京都の四条南座の引札である。

図3 四条南座引札



出典：

https://www.dh-jac.net/db1/ban/results1024.php?f1=A-1-4R-03_026&f46=1&enter=portal&skip=0&-max=1&enter=portal&lang=ja

南座の歴史は古く、その起源は江戸時代初期に出雲の阿国が京都市中でかぶき踊りを披露したことにまで遡る。歌舞伎を中心に芝居町として発展した四条河原において、南座は400年の歴史ある劇場として、現在でも伝統的な古典芸能だけではなく、様々なジャンルの演劇やコンサート等が行われている⁽¹⁾。引札に描かれた1909年の公演も、「新派コメディ」と題して、当時人気を集めた新派による喜劇4作を上演している。この新派とは、明治維新後の演劇改良運動の中で誕生した角藤定憲による壮士芝居や川上音二郎の書生芝居から発展し、それまでの歌舞伎とは異なる新しい現代劇の形を作り出した。その後、伊井蓉峰、

(1) 南座については <https://www.shochiku.co.jp/play/theater/minamiza/history/> などを参照。

高田実、喜多村緑郎らへと新派の流れは受け継がれ、明治から大正にかけて多くの新派一座が生まれた⁽²⁾。「保険ぎらひ」の作者である太郎冠者と新派の関わりは深く、高野（2002）によれば、「この時期の太郎冠者の仕事をふり返ってみると、彼が当時の新派のリーダーたちと万遍なく付き合っていることに気づく。『思案の外』『女天下』『保険ぎらひ』『渡辺』は真砂座を拠点にしていた伊井蓉峰一座のための作品だった。『高襟』『正気の狂人』『空中飛行機』は本郷座の高田実一座のための作品だった。そして正劇運動をつづける川上音二郎一座へは『玉手箱』『新オセロ』『啞旅行』『座敷びらき』の四篇を提供している」⁽³⁾と述べている。この中で、「保険ぎらひ」は伊井蓉峰一座のための作品とあるが、彼の名前は実は図1の「三崎町改良座引札」の真ん中にも「伊井蓉峰補助」と記載されている。つまり、「生命保険」も「保険ぎらひ」も新派一座の公演の中で上演されているのである。図3によれば、新派コメデー4作のうち、イラストでは「保険キライ」となっているが、「保険ぎらひ」は第2番目の演目となっている。偽の火事騒ぎに慌てふためき、店の中の道具を山高く背負った質屋主人の伊勢屋久兵衛と、その姿に思わず笑ってしまう娘のお愛と召使の静江、そして荷物を支えるかのような勧誘員の山川が描かれている。その横では火の見櫓のような細長い足をした友人の安田がその様子を見下ろすように半鐘を鳴らしているという、面白い構図の絵である。なお、この第3番目の演目である「正気の狂人」も同じく太郎冠者が原作の作品である。

最後に、図4は1913年1月1日の久松町明治座の引札である。

この明治座も、歌舞伎座、南座と同じく明治時代から今日まで続く歴史ある劇場である。その始まりは江戸末期の富田三兄弟の芝居にまで遡り、その後、度重なる災難に見舞われながらもその度に出資者が現れて再建を果たし、喜昇座、久松座、千歳座、明治座と名前を変えて今日に至っている。特に1911年に二代目市川左團次から明治座の座元を伊井蓉峰が譲り受けてからは、新派の牙城となる⁽⁴⁾。実際、図4の引札は伊井蓉峰が座元となってから2年後の公演のもので、下段の配役表を見ると、「正直屑屋」「妹背山婦女庭訓」「保険ぎらひ」の3演目とも全てに伊井蓉峰の名前が見られる。

また、明治座公演の「保険ぎらひ」のイラストは、一冊の本の表紙に見立ててデザインされ、タイトルや作者等が書かれたスペースで上下を斜めに区切り、その下部では久兵衛、お愛、静江、山川による火事騒ぎの場面が描かれ、上部ではそのやり取りを覗くようにし

(2) 新派については <https://www.shochiku.co.jp/shinpa/about/history/>などを参照。

(3) 高野（2002）p.32。

(4) 明治座については <https://www.meijiza.co.jp/anniversary/>などを参照。

明治期の演劇に描かれた保険（稲葉）

て半鐘を叩く安田の姿が描かれている。図3と同じく、主要キャストが揃ったまさに芝居の一番の見せ場である。明治から大正にかけての引札は絵も手が込んでおり、この当時の挿絵は、江戸時代に活躍した錦絵と呼ばれる分業木版画の絵師たちの手に依るものが多く、現在では美術品としての価値も高い。この錦絵について、岡山市のホームページでは、「錦絵は江戸時代後期から明治時代まで続き、多数の版元、絵師、彫師、摺師らが携わって、共同制作で多くの傑作を残しました。絵画芸術を量産して庶民へ流布させ、さまざまな情報の伝達に貢献した錦絵の伝統は、明治時代には広告や初期の新聞（錦絵新聞）、引札などへ広まり、高い技量に支えられた版画の芸術を一般市民の日常へ浸透させました」⁽⁵⁾と書かれている。

図4 久松町明治座引札

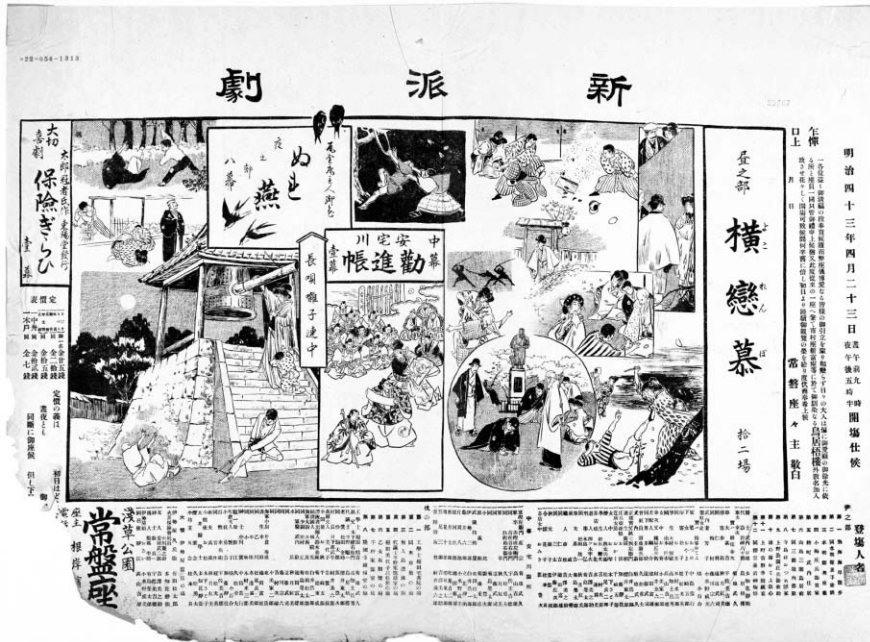


出典：
https://www.dh-jac.net/db1/ban/results1024.php?fl=A-1-4L-01_015&f46=1&enter=portal&skip=0&-max=1&enter=portal&lang=ja

次に、図5は1910年4月23日開場の浅草公園常盤座の引札である。新派劇と銘打ち、昼の部「横恋慕」中幕「勸進帳」夜の部「ぬれ燕」の演目名と挿絵が描かれているが、「保険ぎらひ」については残念ながら文字のみの掲載となっている。

(5) <https://www.city.okayama.jp/kurashi/0000009409.html> を参照。

図5 浅草公園常盤座引札



出典：

https://archive.waseda.jp/archive/image-viewer.html?arg={%22subDB_id%22:%2279%22,%22detail_page_id%22:%221;429987%22,%22image_no%22:%221%22,%22kind%22:%220%22}&lang=jp

また、当時の『東京朝日新聞』に「保険ぎらひ」の上演について掲載された記事も3点確認できたので以下に紹介する。図6は1909年2月25日に掲載された横浜賑座、図7は1910年4月22日に掲載された浅草公園常盤座、図8は1912年12月27日の久松町明治座の新聞記事である。このうち、常盤座と明治座については引札でも確認できているが、図6の横浜賑座の公演についてはこの記事による情報のみである。ただ、そのいずれの記事でも、演目の内容は異なるが、公演の順番として、1番目の演目、中幕、そして最後に大切喜劇「保険ぎらひ」が上演されている。実はこれまでに紹介した「保険ぎらひ」が上演された5公演のうち、南座を除く、歌舞伎座、明治座、常盤座、賑座の4劇場で「保険ぎらひ」は「大切」となっている。「大切」とは歌舞伎のその日の公演の最終演目のことで、江戸末期に前の演目の筋立てとは全く関係がない一幕物の演目を終わりに付け加え、1日の芝居の最後を明るく終わるようにしたことが始まりとされる。後に、「切」という字では演技が悪いということから、「大喜利」と書かれるようになった⁽⁶⁾。このことから、「保険ぎらひ」は一日の演目を明るく終えるための喜劇として親しまれていたと思われる。

(6) https://www.nhk.or.jp/bunken/research/kotoba/pdf/20180801_2.pdf を参照。

図6 横浜賑座の新聞記事

▲横浜賑座 一番目 時島旅客御所染「八幕、申
 孫新作「西南戦争」四幕、大切喜望「保険きらひ」役
 助は酒類控、伊勢屋久兵衛、二郎、遊枝、小娘、之
 助、御所の五郎藏、友人宇田武二郎、宮脇、系影、土右
 衛門、相野利秋、會社員山川、市原、後園巴之丞、篠
 原國幹、梶原源八、娘おあひ、(助之助) 拾子、まづ
 幸、四郎、要定子、下女新江、(弁升) 桜元、しのぶ、四田
 官藏、(是法) 花道志摩之助、有田受助、(左近) 照者名
 合平、池邊吉十郎、(剛若) 時島、相野要樹子、(結枝) 百
 合の方、月組の上條、刑府、助、(實入) 的商人、(正三
 郎) 女房お松、流石梅、甲辰、五郎、(歌前) 雷枝、刺
 太、後原松枝、村田新八郎、(千太郎) 叔岡曾平、
 逸見十郎、(福十郎) 兩城達州、池の邊、(御野) かは
 る、(照者) 鏡念、(左門次) 篠島矢九郎、下條、(作梅車)
 夜叉丸、池上四郎、(大よし)

出典：『東京朝日新聞』1909年2月25日朝刊 p.7。

図7 常磐座の新聞記事

▲明治座五月狂言 一番目 關ヶ原合戦「二番目
 「白根松」と振り開場は五月七日の旗定。
 ▲常磐座 廿三月初日丑の節「横松」中、(安
 宅川) 勘次郎「夜の節、ぬれ燕」大切喜望「保険きらひ
 ▲美音會四月例会 卅日午後六時より有楽座に
 於て開す

出典：『東京朝日新聞』1910年4月22日朝刊 p.7。

図8 明治座の新聞記事

▲明治座 一日初日一番目 正直府座「八幕中幕
 「妹背山御殿」天切喜望「保険きらひ」役助は伊
 基太郎、遊御殿七、實入商人村田、妹鏡子、鳥帽子
 折来女下女龍江、(木村) 車夫卯之助、四川吉藏、官女
 (藤井) 後妻お節、友人龍十、官女(丸山) 娘お千代、橋
 姫、娘おあひ、(石川) 一子、(一日) 出夫、高橋、(藤
 田) 正治、官女山川、幾之助、(井上) お相撲源次、官女、
 安田竹二郎、(深澤) 盛芝、番 庄兵衛、津坂源
 若伊勢屋五郎、(荒尾) 蘭、(次) 月岡、(次) 官女、(市
 村) 福田、(左衛門) 官女伊勢屋久兵衛、(福) 娘お節、
 豆蔵、(お村) 木下、(府) 政雄、(入) 龍大佐、娘お三輪、
 實入紳士、伊勢屋、お初、友人林子、(村) 女、(石川) 幸、
 友浪娘お染、友人須磨子、官女、(井岡) 友送娘お光、
 友人常子、官女、(山口) 藤子、官女、(宮田) 雁入乙吉
 (堀河) 藤田、(妻) 菜子、(桂) 女中おかゆ、(而) 物、(門) 附
 (吉岡) 紳士、(山崎) 村田、(小) 作人、(人) 夫、(小) 村、(野) 部
 (彌) 愛、(人) 甲、(人) 夫、(櫻) 井、(友) 人、(龍) 田、(次) 郎、(人) 夫
 (佐川) 巾着切、(人) 夫、(菊) 波、(娘) お花、(千) 代、(川) 藤子、(酒
 風) 丁、(有) 竹、(藤) 子、(二) 葉、▲有楽座女盛劇 一月

出典：『東京朝日新聞』1912年12月27日朝刊 p.7。

「保険きらひ」について、宮脇（1993）では「この戯曲は、この年五月の歌舞伎座興行の一つとして演じられたが（主役の山川幾之助を羽左衛門が、また伊勢屋久兵衛を猿之助が演じ、梅幸、菊五郎、訥升などの名優が脇役を固めていた）、大手日報の興行評はこ

れについて何も触れていない。話題を呼ぶほどの評判とはならなかったのであろうか⁽⁷⁾と書かれている。当時の「保険ぎらひ」に対する評価がどのようなものであったのか、それが分かる劇評などの資料を見つけることはできなかったが、引札や新聞記事から確認できただけでも、「保険ぎらひ」は1908年の歌舞伎座での初演から1913年の明治座公演までの5年間にわたって上演され続けている。このことから、「保険ぎらひ」が当時の人々に受け入れられ、演目の最後を飾る大喜利として定着していたことは間違いないだろう。

Ⅲ 「保険ぎらひ」に描かれた当時の保険事情

戯曲「保険ぎらひ」は1908年に東陽堂から出版された太郎冠者『新作喜劇集』に所収されているうちの一遍である。当時の新聞に掲載された『新作喜劇集』の広告が図9、図10である。この喜劇集には、「保険ぎらひ」のほか、後に帝国劇場でも繰り返し上演される太郎冠者の代表作とも言える「唾旅行」「女天下」が収められている。

図9 新聞広告①



出典：『読売新聞』1908年9月21日朝刊 p.3。

図10 新聞広告②



出典：『読売新聞』1908年11月29日朝刊 p.4。

「保険ぎらひ」の主要な登場人物は、質屋の主人である伊勢屋久兵衛、その娘のお愛、伊勢屋の召使の静江、共益火災保険会社勧誘員の山川幾之助、友人の安田武二郎の5名で

(7) 宮脇 (1993) p.185。

ある。彼らの会話から、「保険ぎらひ」で描かれている当時の保険事情を検証してみよう。

最初に、芝居の前半、お愛と静江が、そろそろ山川が現れる時分だと待ちわびながら、2人であれこれ話をしている場面である。その中で、山川がお気に入りの役者に似ているからご熱心なんだと冷やかされたお愛は、山川について「役者に似て御出でだから気に入ると云ふ譯じゃないが、妾やツクツクと彼の方の商売に御熱心なのと、辯舌の爽かなのに感心して丁ったわ。マ考へて御覧、世の中には色々商売もあるけれど、大概品物を売ったり買ったりして儲けるのだらう、處が火災保険だの生命保険なんと云ふものは、何にも無くて只人を説得しては保険を付けさせて商売にするのだもの、本当に並大抵の事ぢゃありやしないわ。夫れも文明の教育を受けた人達なら保険の必要な事位は分るけれども、何を云ふにも相手が前世紀の阿父さんだろう、おまけに天性頑固で吝嗇一點張り主義だもの、仮令自分の利益になる事でも、お金を出す事は何一ツ承知するものかね」⁽¹⁸⁾と反論する。それに対して静江も「私も始めは保険なんて何だしらんと思ひましたが、毎日毎日御傍でうかがうもんですから、此頃はモウ保険博士になりましたわ」⁽¹⁹⁾と相槌を打つ。

この戯曲が書かれた1908年は、わが国初の火災保険会社である東京火災が営業を開始してから20年余りの頃である。加藤（1963）によれば、明治30年代に火災保険業の発展に貢献した人物の話として「そのころわが国経済界は火災保険の必要性を相当認識していたにもかかわらず、いまだその普及は微々たるものだった。それは当時における火災保険料率が高度であったため保険料も高く、したがって一般大衆はもちろん、商人といえども特殊の事情のない限り商店、倉庫に火災保険を掛けることは余り行わなかった」⁽²⁰⁾という。現在のように保険のCMをテレビ等で目にする訳でもなく、まだまだ保険というものが身近になっていなかった時代である。お愛の言うとおりの、目に見える品物ではない保険という商品、その必要性を説明するだけで契約まで持ち込むのは至難の業であったに違いない。特に、久兵衛のような旧態依然とした人物には保険勧誘員も苦勞したことであろう。

また、火災保険の必要性について、山川が久兵衛に説明している場面で、山川は「抑々火災保険と申すものは、年々被保険者から僅かの保険金（原文ママ）を受取る代りに、一朝其保険物件が火災に罹る時は、会社は直ちに其損害を賠償するの大責任を有するので有りますから、獨り会社其ものの利益計りでなく、第一に被保険者即ち保険を付けさせる方の御利益と申さねばならんです」⁽²¹⁾と、近代的保険の仕組みについて整然と述べている。

(18) 太郎冠者（1908）pp.9-10。

(19) 太郎冠者（1908）p.11。

(20) 加藤（1963）p.155。

(21) 太郎冠者（1908）pp.37-38。

一方、お愛と静江にまで山川の味方をされた久兵衛は「此家は木の葉や鉋ッ屑の様に、ソウベロベロ焼ける様な家ぢありません」⁽²⁾と怒鳴り散らす。

すると山川は、ご主人の言うことももっともですがとした上で、「仮令御宅から発火しませんが類焼の虞は必しも無いとは云へんです、近くは函館の如き野田、新潟、日光、呉の如き火元は一ヶ所でも僅か数時間にして数千の建物を灰に化して了つた例も有りますのです。然も其中には土蔵、石造、煉化の建物も少なからんのに是亦た盡く烏有に帰して了ひました。又極端な例を申せば一兩年前サッポロビール会社の氷蔵から発火した事さへ有るので、時として火災は最も恐るべき一つの天災とも云はねば成らんですな……」⁽³⁾と、近年の事例を引き合いに出して、火災の恐ろしさを説明している。

その中で、山川は極端な例としてサッポロビール会社の火災を挙げているが、実際に、当時の新聞で報道された記事が図11である。

図11 札幌麦酒会社出火詳報



出典：『東京朝日新聞』1905年10月30日朝刊 p.6。

記事によると、サッポロビール会社の火災は、1905年10月28日午後7時20分頃に向島札幌麦酒会社工場の2階と3階との間より出火した。この火災を発見した巡視は直ちに事務員などに連絡し、一同が現場に駆けつけたときには製氷室の上部にある3階の物置場一面が猛火となっていたという。火災はおおよそ午後10時30分頃に鎮火した。さらに記事の続きでは「二十萬円の保険」という見出しで、サッポロビール会社はそれまで火災保険に入っていなかったが、火災から約4週間前の10月1日に日本火災、明治火災、東京火災、横浜火災の4つの会社と20万円の聯合保険を契約していた。現在、この4会社は調査員を派遣して火災の原因などを調べているが、損害高はまだ不明だという。この聯合保険とは、共

(2) 太郎冠者 (1908) p.39。

(3) 太郎冠者 (1908) pp.39-40。

同保険のことであり、共同保険は「複数の保険会社が同一の被保険利益について共同して危険負担責任を引受けること」²⁴によって、リスクを分散させるというメリットがある。

火災保険の必要性を訴える山川だが、久兵衛は意地でも取り合わないどころか、力づくで追い返そうとする。そこで予め打ち合わせしていた通り、山川が大きな咳払いを2回すると、外で待機していた安田が手に持った半鐘を打ち鳴らした。火災を報せる半鐘の音に、店の中の荷物を背負って慌てふためく久兵衛は、帰ろうとする山川を必死で引き止める。以下、原文のまま紹介する。

久兵衛荷物を背負ひたる儘、山川の前に平身低頭して、
久『何にも申しません、附けます直ぐ附けます、火事の消える迄預けます。
山『火事の消える迄は困りますから、一年分願ひます。
久『一年分？幾何です。
山『御当家なら四厘ですな。
久『エー？四厘！然んなら早くから云へば好いのに。
懐中の錢袋より狼狽て五厘銅貨を一つ取り出し、
久『サア五厘だ、早く一厘御釣錢を……
山『イヤ四厘とは千円で四円の割合です、御宅なら二万円と見積り八十円。
久『八十円？
お愛、静江、窓よりチョット表を見て、
両『大変〜モウ焼けさうですよ。
山『御嫌なら帰ります。
立たうとすれば久兵衛愈〜泣面して、
久『ウーン、出します〜八十円……ウーン。
又々懐より八十円出して渡す。²⁵

この中で、山川の台詞に「イヤ四厘とは千円で四円の割合です、御宅なら二万円と見積り八十円」とあるが、これはまさに保険料率を表している。広海・埜編（1997）では、保険料率とは「基準保険金額（通常、火災保険の場合は1,000円、生命保険の場合は10万円）に

²⁴ 広海・埜編（1997）p.55。

²⁵ 太郎冠者（1908）pp.53-54。

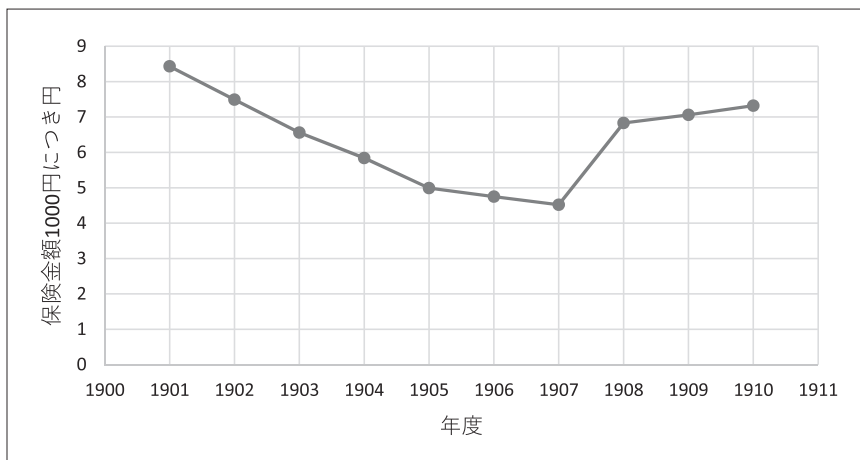
対する保険料を「保険料率とよぶ」²⁶⁾とあるように、共益火災保険では、保険金額1,000円に対して4円の保険料がかかるから、伊勢屋久兵衛宅の場合は保険金額を2万円と見積もって保険料は80円になると、山川は言っているわけである。久兵衛が勘違いした「四厘」とは1円に対しての割合のことである。

それでは、実際、この「千円で四円の割合」という保険料率は、当時の火災保険業界で妥当な数値であったのだろうか。「保険ぎらひ」がこびき町歌舞伎座で初演されたのは1908年5月であり、脚本はそれ以前に書かれていたと考え、1901年度から1910年度までの内国会社全体の平均保険料率の推移を図12に示した。

「保険ぎらひ」が初演された1908年度は7円近くに跳ね上がっているが、1907年度は4.52円、1906年度は4.75円という数値になっている。脚本が執筆されたのが1908年5月以前だと考えれば、太郎冠者が参考にした保険料率は1907年度または1906年度のものであった可能性が高い。そう推測すると、山川の勤める共益火災保険会社の「千円で四円の割合」という保険料率は決して的外れな値ではなかったと言えるだろう。

また、当時のわが国の火災保険業界について、火保日報社編（1950）では明治「三十七・八年の日露戦争は恰も大東亜戦争の如く国運を賭しての大戦争だったから保険どころの騒ぎではなかった。従つて財界も萎微沈滞し切つて居り保険界も不振のドン底に推移したのであるが、三十九年にはこの大戦も我国の大捷裡に終了し国民は挙つて戦捷を祝賀気分に

図12 平均保険料率の推移



出典：瀧谷（1935）p.570より作成。

²⁶⁾ 広海・埜編（1997）p.206。

酔い、而かも其の後に大好況期到来となつたが、損保界は戦前から熾烈な競争を続けて居り、料率は極度に低下して東京市内の平均保険料率は対千二・三円程度と云ふ実状であつた（中略）既設の大小会社共に非常な苦境に立つてゐた處剩さえ明治四十年八月函館の大火、翌四十一年新潟の大火等が相次いで勃発したので、遂に日宗火災、日本旅館火災、内外火災、大和火災等の小会社は破綻消滅するに至つた（後略）^{②7}と記録している。

このように、当時の火災保険業界は、地域ごとに様々な料率協定が結ばれたりはしていたが、相次ぐ新設会社により過当競争が激化した結果、料率の低下を招いて、火災保険会社は苦境に陥っていた。そこへさらに経営の悪化に追い打ちをかけたのが、各地で発生した大火である。大火については、前述の山川の台詞の中でも、函館、野田、新潟、日光、呉の名前が挙げられている。この5つの大火の発生状況を一覧にまとめたものが表1である。

特に、1907年8月の函館大火は甚大な被害をもたらしたことが分かる。焼失地域が全函館の8割、焼失戸数12,390戸、損害額3,500万円に達した函館の大火は、火災保険業界はじまって以来の大惨禍であったという。保険会社各社の支払保険金は、東京火災95万円、明治火災53万円、日本火災47万円、大阪火災14万円、共同火災12万円、内外火災11万円など10社合計で約300万円であったが、当時のわが国火災保険会社の総保険料収入は624万2,000円に過ぎなかった。^{②8}

表1 大火の発生状況

場所	年月日	主な損害
函館	1907年8月25日	焼失戸数12,390戸、損害額3,500万円
野田	1908年3月5日	焼失戸数850戸、損害額500万円
新潟	1908年3月8日	焼失戸数1,178戸、損害額400万円
日光	1908年3月25日	焼失戸数73戸、損害額50万円
呉	1908年3月26日	焼失戸数76戸、損害額30万円

出典：武田（1997）p.6、『読売新聞』1908年3月7日朝刊 p.3、『読売新聞』1908年3月11日朝刊 p.3、『東京朝日新聞』1908年3月26日朝刊 p.6、『東京朝日新聞』1908年3月27日朝刊 p.2より作成。

函館の大火と比較すると規模は小さく感じられるが、野田、新潟、日光、呉の大火も新聞に大きく採り上げられるほどの大きな被害が出た火災である。また、翌年の1909年には

②7 火保日報社編（1950）p.5。

②8 武田（1997）p.6を参照。

大阪市北区で焼失戸数11,360戸の火災が発生しており、各地で相次ぐ火災によって、火災保険会社の経営は大打撃を受けた。このように実際に起きた大火の記録を、太郎冠者は忠実に脚本へと反映させていることに注目して欲しい。さらに「保険ぎらひ」の上演が1908年5月であることを踏まえた上で表1を見ると、函館以外の4つの大火の発生はいずれも歌舞伎座公演のわずか2カ月前、1908年3月の出来事であることに驚くばかりである。

IV 結びにかえて

以上、明治期後半の演劇「生命保険」と「保険ぎらひ」に描かれた保険について検証を行ってきたが、昭和期の簡易保険では、演劇を保険の宣伝広告として利用していたという記録が残されている。逓信省管理局 [編] (1938) によれば「演劇が宣伝広告の用に供されたのは、既に江戸時代からのことで、常時既に劇全体が広告の意圖からなるものを始め、近ごろ流行のタイアップ (Tip up) の形式によるものさへあつたことは、一般に知られてゐるところであつて決して新しい方法ではない。が、それが今なお有爲な宣傳媒體として利用されてゐることは、畢竟『一個の劇場に集まる』比較的購買力の平衡した集團に強く印象的な廣告を爲し得る、といふ効果的な特徴によるものであらう。私どもは、こゝに捧げるさゝやかなる脚本集が、各局の協力によつて簡易保険宣傳戦上の新鋭戦士として活躍するのを待望すること切である」²⁹⁾ と考え、簡易保険を普及させるために演劇を活用していた。明治期の2作が生命保険や火災保険の広告として制作されたものではないことは筋立てから見ても明らかだが、一般市民に保険という商品の知名度を上げるには大いに役立ったと思われる。

1867年に福沢諭吉が『西洋旅案内』にて近代的保険制度をわが国に初めて紹介してから30年余りで、保険は演劇にも進出した。「生命保険」と「保険ぎらひ」、保険をタイトルに冠した2つの演劇作品が上演されたのは、それぞれ「新派の父」と呼ばれる川上音二郎の改良座と、演劇改良運動に熱心だった福地桜痴が中心になって開場した歌舞伎座である。新しい現代劇の題材として、人々の人生に深く関わる保険はうってつけのネタであつたらう。そして、生命保険金殺人というテーマを巧みに用いたサスペンス作品として「生命保険」が、火災保険の勧誘を巡るドタバタ喜劇として「保険ぎらひ」が誕生したのである。

最後に「保険ぎらひ」の作者である太郎冠者こと益田太郎について記しておく。益田太

²⁹⁾ 逓信省管理局 [編] (1938) pp.1-2。

郎は1875年に三井物産の創始者である実業家の益田孝の次男として生まれた。東京の中学を卒業と同時に英国ケンブリッジのリース校へ留学し、その後ベルギーのアントワープの商科大学で学び、1899年に日本へ帰国する。帰国後は横浜正金銀行（後の東京銀行）で実務を学び、1902年に日本精製糖の常務取締役役に就任、1906年には台湾製糖の取締役役に就任する。実業家としての傍ら、太郎冠者のペンネームで創作活動を始めたのは1904年のことで、雑誌「文芸倶楽部」同年11月号に「鴛鴦亭」という喜劇が掲載された。1907年には帝國劇場の発起人の1人として1911年の開場に尽力したほか、川上貞奴が創設した帝国女優養成所を引継ぎ、多数の女優を世に輩出した。⁶⁰

実業家でありながら、脚本家でもある益田太郎冠者であればこそ、「保険きらひ」のような、火災保険に関する詳細な知識や当時の災害の状況を盛り込んだ芝居を執筆することができたのであろう。

参 考 文 献

- 正田久次郎（1938a）「我國火災保險會社の沿革（其二）」『損害保險研究』第4巻第1号 損害保險事業研究所
- 広海孝一・埜善多編（1997）『保險用語辞典〈新版〉』日本經濟新聞社
- 稲葉浩幸（2008）『保險の文化史』晃洋書房
- 印南博吉編（1966）『現代日本産業發達史 XXVII保險』現代日本産業發達史研究会
- 火保日報社編（1950）『損害保險變遷史 第二号』火保日報社
- 加藤由作（1963）「企業の繁栄からレジャーまで—損保商品論—」福本邦雄編『繁栄に奉仕する—安田火災海上—企業の現代史34』フジ・インターナショナル・コンサルタント出版部
- 宮脇泰（1993）「明治期の戯曲『生命保險』と『保險きらひ』—戯曲のテーマとされた生命保險・損害保險—」『保險史話—保險史実の一側面—』保險毎日新聞社
- 中川清（1997）「太郎冠者を名乗った実業家—益田太郎の生涯」『白鷗法學』7号 白鷗大学法学部
- 高野正雄（2002）『喜劇の殿様—益田太郎冠者伝』角川書店
- 武田晴人（1997）「火災保險業における料率協定の成立過程」『經濟學論集』第63巻第1号 東京大學經濟學會
- 瀧谷善一（1935）『火災保險料率論』実文館
- 太郎冠者（1908）「保險きらひ」『新作喜劇集』東陽堂
- 遞信省管理局〔編〕（1938）『簡易保險劇脚本集』遞信省管理局規畫課

⁶⁰ 益田太郎については中川（1997）や高野（2002）を参照。